

A—1 薬師堂碑文

文久 3 年（1863）に高忠商店の先祖が、薬師堂や高忠商店の由来についてまとめ、さらにそれを仙台藩の藩校「養賢堂」の学頭である大槻清崇（磐溪）が書いたものである。しかし、この碑文は石碑に刻まれることはなくまぼろしの碑文となった。実物は現存するがこれはその写しである。現在、薬師堂（金ヶ瀬広表地区）には高忠商店の先祖高橋忠助氏の頌徳碑がある。

A—2 看板 「毎月三日公休」

戦後、統制品（石油、砂糖、粉、煙草等）を販売する場合は組合を結成しなければ販売できなかった。そこで、町内の商店で組合を結成し、事務所を高忠商店の裏の方に置きそこで事務を執っていた。組合では月 3 日間 5 のつく日を公休日とし、これはその事を客に知らせる看板である。しかし、実際には客が来るために閉めることは少なかったという。

A—3 春日詠五首和歌

伊達政宗が春の日に特に花を詠んだ 5 首の短歌が書かれてあるもので、これはその写しである。明治 30 年 1 月 18 日に河北新報が発行したことが活字で印刷されている。

A—4 書額 「仁者寿」 猪狩史山書

猪狩史山（1873～1938） 漢学者 教育者 郡山市出身

A—5 「満州事変当時の写真集」

満州事変の生々しい記録写真である。村井賢二氏が町に寄贈したものである。丁寧にページをめくって見てほしい。

A—6 「大河原繭糸業組合定款」

A—7 絹本墨画単彩「仙台旧城之図」

東側から見た図である。画面を横切るように広瀬川が流れ、そこにかかる大橋から大手門に通じる道を中心として、山上の城郭や両脇にある家臣の屋敷などが描かれてある。

A—8 油絵 原阿佐緒自筆絵

原阿佐緒（1888～1969）は日本の歌人 黒川郡大和町生まれで本名浅尾。

宮城県立高等女学校を中退し、日本美術学校（後の都立忍岡高校）で日本画を学ぶ。1909年新詩社に入り与謝野晶子に師事、「スバル」に短歌を発表。1924年に北原白秋らの歌誌「日光」に参加。歌集に「涙痕」「白槿」など。

A—9 絹本着色「猿図」 森狙仙画

松の木の上に猿の親子がいる。子猿は親猿が手にした松ぼっくりで遊び、画面の右側には蜂が一匹描かれている。猿と蜂の組み合わせは中国で生まれた画題である。

森狙仙（1747～1821）は大阪で活躍した「猿描きの狙仙」と言われるほど猿の画に長けた絵師。猿の生き生きした表情やユーモラスな仕草、巧妙な擬人化による親しみやすさは狙仙ならではのものである。

B—1 紙本墨画淡彩「商山四皓告図」 正卿画

秦の始皇帝の時代、乱れた世の中から離れて商山に隠れ住んだ四人の高士（徳と知識を備えた立派な人物の総称）がいた。彼らはいずれも年老いて髪や髭が白かったという。「皓」とは「白色」の意味

B—2 紙本墨絵淡彩 山本梁谷画

深い山の中、激しい流れの川の上に渡された石造りの橋を二人の高士が歩いている。彼らは進行方向とは逆の空を見上げている。

B—3 絹本着色 「石榴白雉図」 菅井梅関画

岩に白い雉がとまっている。その下には南天と白菊が、上には実をつけた石榴があり描かれた季節が秋であることがわかる。

菅井梅関（1785～1844）は仙台の生まれ、仙台四大画家（東東洋、小池曲江、菊田伊州、菅井梅関）の一人で、卓越した墨技を有し清澄な筆致による墨梅図や豪快な気迫のこもった山水画などを残した。

B—4 紙本墨画 「溪山深秀図」 山内畊烟画

川の上に建てられたあずまやに一人の高士が佇んでいる。赤く色づいた木があることから秋の情景である。

山内畊烟（1828～1907）南三陸町出身。幕末、明治時代の画家。小西皆雲、茂庭竹泉と共に仙台南宗の三大家といわれた。

B—5 絹本着色 「梅花小禽図」 凌泉画

一年の中で最も早く花をつける梅は、その姿と芳香から人々に大変好まれる花である。鶯も春を告げる鳥として親しまれ、これらは歌や詩に詠まれ絵によく描かれる組み合わせである。

B—6 絹本墨淡彩 「梅竹双鶴図」 狩野探信画

梅と笹竹の傍らに二羽の鶴が佇んでいる。梅は 5 つの花びらがあることから五福（長寿、富裕、無病息災、徳、平和）、竹は三つに分かれる葉がそれぞれ多子、多福、多寿を象徴するとされている。長寿の鶴と共にさまざまな幸福への願いがこめられている。狩野探信（1653～1718）は江戸時代前期から中期にかけての画家で、狩野派を代表する絵師である狩野探幽の長男である。父の跡を受けて鍛冶橋狩野家を継ぐ。

B—7 三陸大津波の記録

過去帳の中に書かれた明治の三陸大津波の記録である。

明治 29 年 5 月 5 日（旧暦）午後 8 時に大津波が発生し、負傷者並びに死者が 4 万人余とあり、今回の東日本大震災に匹敵するほどの地震であったことがわかる。救助金 3 円（現在の金に換算して約 3 万円）を出したとある。震源地の位置なども記された貴重な記録である。

B—8 書額「和気満堂」 後藤新平書

後藤新平（1867～1928）ドイツのコッホ研究所に北里柴三郎と共に留学し、帰国後内務省衛生局長に就任。その後、逓信大臣に就任、国鉄総裁、東京市長を経て、昭和になって政治倫理化運動を始めた。大正 2 年に大河原を訪れて大書揮毫している。

B—9 書額「死生一貫」 頭山満書

頭山満（1855～1944）は西郷隆盛の志を継いで大陸進出を心願し、大亜細亜主義を主張する玄洋社には多くの青年が集まった。これら社員は、日清・日露戦争で大陸に渡り、朝鮮独立運動で活躍した。明治、大正、昭和に渡って右翼陣営の大御所として重きをなした人物である。

B—10 書額「唯是至誠」 成天書

落款には藤沢正の名があるが詳細については不明である。金ヶ瀬公民館の為書きがあり、昭和 44 年に出張所が閉鎖されるまで掲げられていたものが、その後町に寄贈されたものである。

C—1 「梅子留・・・」

C—2 軸物 「諫彰・・・」 後藤新平書

後藤新平については B—8 参照

C—3 書額「洗心」 露牛和尚書

露牛和尚は詩仙堂（京都丈山寺）住職、石川琢堂和尚で、大河原に 2 度訪れている。庭園の美しさで知られる詩仙堂は、1986 年英国チャールズ皇太子、ダイアナ妃が来日の際に訪れたという由緒ある寺である。

C—4 書額「上善如水」 二荒芳徳書

二荒芳徳（1886～1967）伊達家九代藩主伊達宗徳の九男 貴族院伯爵議員
日本体育大学教授 ボーイスカウト日本連盟顧問

C—5 浅草宇一郎書簡 2 通と表書き

明治政府は最後まで抵抗する会津藩に対して会津追い討ち令を出し、奥羽鎮撫総督一行を福島に派遣した。その中心になったのが世良修蔵である。世良が福島の旅館に宿泊している時、仙台藩士と福島藩士に暗殺されるのだが、その藩士たちを案内したのが地域に詳しい目明しの浅草宇一郎である。浅草宇一郎は文政元年（1818）大河原生まれ。この書簡は宇一郎から高橋寛之助（高忠商店の先祖）に送ったもので、寛之助の依頼したことは了解したこと、それに卵を戴いたことへの御礼が書かれている。

C—6 川崎公用人忠次郎文書

この文書は、土地の購入資金として借りたお金を利息と共に期限まで返済する旨を高橋忠次郎（高忠商店の先祖）に送ったものである。安政 3 年は幕末に近いころである。

D—1 婚礼衣装 色打掛 白無垢

江戸時代のもの。色打掛の様子は手描き、裏地は紅絹（もみ）

D—2 往診用薬箱

鈴木家の先祖が江戸時代に仙北で開業していた時に使用していた往診用薬箱で漢方の薬草が今も入っている。

D—3 医学専門書（産科）2冊

「産論翼」 賀川玄悦（1700～1777）賀川流産科の鼻祖 これは明和2年に出版されたもの。胎児は倒立が正常胎位であることを示した最初の書。

「産科新編」 蛭田玄仙（1745～1817）それまでの賀川流の座産から、より負担の少ない仰臥位出産を薦めるなど近代産科の基礎をつくった。

D—4 ポスター 「大洋醸造元 遠藤屋醸造部」

大河原では大正時代に笹森利八郎が「広瀬」「丸宮」の銘柄で酒造経営に乗り出していた。しかし、大正9年に廃業に追い込まれるとそのあとを継いだのが遠藤彦三郎と村上勇社長の不忘醸造株式会社である。遠藤屋は「大洋」という銘柄で売り出した。しかしこれも昭和初年に廃業している。これに代わったのが村田町の酒問屋森巳である。

E—1 紙本金地着色「石榴小禽図衝立」 中村爽歩画

石榴は夏に実をつけ、そのまま時間が経つと割れてたくさんの実が見えるようになることから、豊かさ、特に子宝に恵まれることを表している。

中村爽歩（1899～1974）仙台市生まれ。東京美術学校で学び、戦後仙台を本拠に日展などで活躍する。

E—2 振袖

大正時代のもの。結婚前の若い人が着用。刺繍が素晴らしい。

F—1 百徳着物

江戸末期から明治初期のもの。子供が生まれた時に、百の徳があるようにと近隣縁者から端布をもらい縫い合わせて作った着物で、子供が生まれた時に互いに端布を持ち寄る風習があった。主に東北、北陸にみられる。

F—2 瓶 3本

酒瓶 細いほうの瓶には「電気政宗 仙台浅見酒造店 一升入」の文字が見られる。明治から大正時代のもので型枠で作られた瓶であるが、表面にはこてをあてた跡があることから丁寧に作られたものであると思われる。

三升瓶 大正から昭和にかけて使われたもので、この瓶をもって醤油を買いに行く時に使われたものである。

F—3 花器 村田整珉作

底には「大日本文政年整珉鑄」の刻印がある。所蔵するお宅では、盆や正月にこの花器に花を生けて仏前に供えるのが習慣。

村田整珉（1761～1837）江戸後期の高名な鑄金家で、置物、水盤、仏具など多様な作品を残す。

F—4 書額 「雨後去・・・」 有井凌雲書

有井凌雲（1893～1985） 東北大学名誉教授 書家

F—5 鹿の角

明治初期から保管されているとのことである。朝鮮の方から来たものと昔から聞かされていたことやその形状からトナカイの角と思われる。

F—6 袴（常時用、夏用各1）

検断職にあった先祖が公用の時に着用した。

F—7 少女出世双六

少女世界の新年号の付録 明治末期に発行されたもので、女子の誕生から嫁入り支度までを都会（右半分）と地方（左半分）の二通りになっていて、順次上がっていくが、途中で都会に行ったり地方に行ったりする。

児童文学者 巖谷小波（1870～1933）編